

事例 1

PDDの特性と基本的な対応

クラスの中に発達障がいの子は必ずいます。障がいによって対応の仕方が変わってきます。その子が何故そんな言動をするのか、障がいの特性を知り、対応を知っておくことはとても大切なことです。では、PDDとはどんな特性があり、どのように対応すればよいのでしょうか。

場面

小学校の2年生の男の子です。教師の指示に従えない、クラスメイトとけんかが絶えない、クラスのざわざわした音に敏感に反応してイライラしたり、「わあー」と大声をだしたりするなどの言動が目立ちました。

保護者に相談し、教育相談や医療にかかることになりました。すると、PDDであると診断がありました。

PDDとは、どんな特性があるのでしょうか。また、どのように対応すればよいのでしょうか。

障がいと対応を考える

PDDとは、どのような障がいなのでしょう。下の四角に言葉を書きましょう。また、どう対応したらよいのでしょうか。下に書きましょう。

PDDとは、と訳され、

やなど

が含まれる。

対応

■ 解説

PDD(Pervasive developmental disorder)とは、「**広汎性発達障害**」と訳され、**アスペルガー症候群**や**(高機能)自閉症障害**などが含まれる。

アスペルガー症候群とは

対人的孤立、こだわりから構成される症候群である。基本的に、環境の変化を嫌い、他人の気持ちや社会の慣習に合わせることが苦手で、自分の世界に合わせて行動する特性をも持つ。こうした対人関係の問題から、人に嫌われ孤立しやすくなる。

対等を要求される人間関係、特に同級生とはかかわりが難しく、支配しやすい年下や合わせてくれる年上と付き合う事の方が多くなる。そこで、さまざまな問題は、同級生の多い学校など集団生活をする場では頻発しやすくなる。命令される、決められる、教えられることを嫌うため、教師に反抗的になることも多い。

高機能自閉症とは

アスペルガー症候群の特性に付け加えて、コミュニケーション能力の貧困さを持ち、一方的な話し方、相手の感情が読めない、昔のことを思い出して誰かに聞いた言葉を繰り返したり、笑い出したり、フラッシュバック(タイムスリップ現象)を起こしたりすることがみられる。

不安傾向が強く、偏ったこだわりや興味をもちやすくなる。こうした偏った興味の範囲内では、通常の子どもにはみられない優れた記憶力や計算力をもつことも多い。

PDDの子の一般的な言動の特徴

集団に馴染めない、音に敏感、相手にルールや約束を厳格に守らせる、人に笑われると過敏に嫌悪を示す、比喩や冗談がわかりにくい、人の心を傷つける過激な言葉を使う、道路の道順などに固執する、一方的に話す、ファンタジー(ひとりの世界)に入る、興味が限られる、活動を完成させようとする(ある種の潔癖症)などの特徴を示す。

【主な対応】

- ・急な指示、修正にきれる→予告をし、承認をとる。
- ・先生にかかわりを持ちたがる→かまってあげる。
- ・不安になり戸惑う→選択肢を与える。
- ・フラッピングやファンタジーがある→かまってあげる。やさしくほほえむ。
- ・周囲の音や声が気になる→訴えを無視しない。音を出す場合は予告する。
- ・しつこく確認して質問攻めにあわせる→見通しを立ててあげる。質問の仕方をほめる。
- ・しつこく順番や約束を守らせようとする→予告をし、承認をとる。論理的に話す。
- ・言葉のウラの意味が読み取れない→ウラの意味に気づかせる。

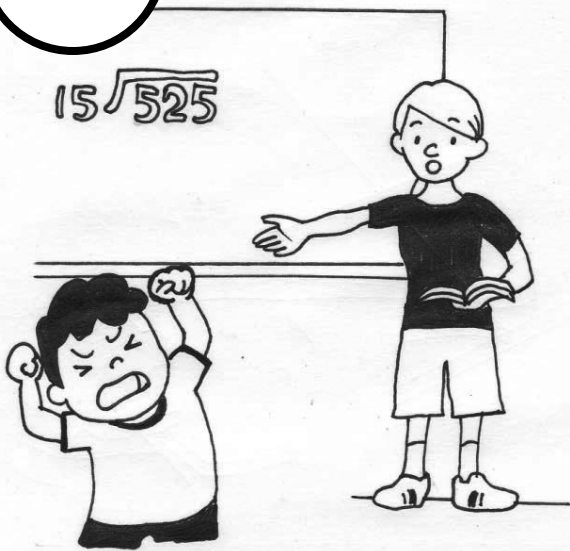
ソーシャルスキルトレーニングを行う。

平山諭『発達障害児の授業スキル－環境対話法を活用する』(麗澤大学出版会)

間違いを恐れ活動しない

「計算しなさい」「考えを書きなさい」などと言っても、じっとして取り組もうとしない子。どのように指導すればよいのでしょうか。

場面



4年生の算数。わり算の筆算の時間。前時に、立てた仮商が大きいときは、何度も消しては計算し直す筆算を学習しました。そのとき、A君は途中まで計算していましたが、仮商が立たないと分かった途端、「わー」と言って、計算しようとしませんでした。その後も、わり算の筆算には取り組もうとしません。「写しなさい」と言えば、正しい商の筆算は写します。

① 原因を考える

A君は、なぜわり算の筆算をやらなくなったのでしょうか。
下に書きましょう。

■①の解説

【原因】失敗するのが嫌だったから。

1 間違い・失敗(=エラー)を嫌がる

広汎性発達障害の子は、

- ・環境の変化を嫌う
- ・自分の世界に合わせて行動する
- ・間違いや失敗(=エラー)を嫌がる傾向がある

という特性を持っている。

この場面で考えてみよう。

今までは、仮商がすぐに商につながっていた。しかし、今回はA君がこれでいけると思って立てた仮商が大きすぎたのである。それだけでも、広汎性発達障害の子にとっては、**大きな変化**であり、商が立たなかったことは、

間違いや失敗(=エラー)なのである。

これが活動をしなかった原因である。

2 エラーレスにする

課題や問題を解いていく上での間違いや失敗はエラーではない。
何もしないことがエラーなのである。

という意識を持たせるのである。

そのためには

やり直しOK

を定着させていくのである。

問題を間違えること

↓

やり直せばいいので構わない

↓

失敗ではない

② 対応を考える

わり算の筆算をしなくなったA君にどう対応しますか。下に書きましょう。

場面

4年生の算数。わり算の筆算の時間。前時に、立てた仮商が大きいときは、何度も消しては計算し直す筆算を学習しました。そのとき、A君は途中まで計算していました。ところが、仮商が立たないと分かった途端、「わー」と言って、計算をしやうとしませんでした。その後も、わり算の筆算には取り組もうとしません。「写しなさい」と言えば、正しい商の筆算は写します。

■②の解説

【対応】 ×がつくことを大いに認め、褒める。

1 大きく×をつける。

全体で例題を行う。仮商を立てる。かけたときにひけないことに気づかせる。

ひけないときは大きく×をつけなさい

と言う。そして
今日は、

×をたくさんつける勉強です。

と趣意説明をするのである。

2 ×がつくことをほめる。

×をたくさんつけて、何度もやり直す人ができるようになっていくことを、くり返しくり返し子ども達に語っていくのである。

ときには、たくさん×がついている子に

すごいな。こんなに×がついている。
勉強ができるようになるぞ。

と

×をつけた子を賞賛する。

そのことで、間違えることが失敗(=エラー)ではなくなり、成功するための1つのステップになるのである。

3 「うつすこと」も奨励

分からない問題は、たとえできなくても、最後に写してもよいのである。だから、分からない問題にも挑戦してみようという気になる。

間違えたら「なおしなさい」
分からない問題は、「うつしなさい」
うつすのも大事な勉強です。
一番いけないのは、ノートに何も書かないことです。

③理由を考える

なぜ、消しゴムで消さずに大きな×をつけてやり直すのでしょうか。考えを下に書きましょう。

■③の解説

【理由1】 ノートも思考もスッキリしてくる

計算では順序がある(例えば筆算のアルゴリズム)。

消しゴムで間違えたところを消して、途中からやるとなると、ノートも思考もグチャグチャになってしまうのである。

特に広汎性発達障害の子にとって、リセットして順序通り進むというのは大切なことである。

そこで、間違いには大きな×をつけ、

改めて書き直していくのである。

計算を、また1からやり直すとなると、面倒だと考える子も出てくる。

消してしまっていれば、また「いくつだったかな」と考えなければならない。

【理由2】 ×をしてやった跡を残しておくからやり直せる

×をしておけば、

×をした所に考えた足跡が残っている。

それを見ながら、手順通りに問題を解いていけばよいのである。そして、間違えたところで手を加えていけばよいのである。

例えば、「仮商が大きかったから、1つ小さい数を立てよう」と言うように。

教室での
エピソード

×がたくさんつくお勉強なんです

～わり算の筆算で×がたくさんつくことを認める。どの子も抵抗なく取り組めた～

1 いつものようにテンポよく例題をする

4年生、「わり算の筆算」の学習である。(2けた)÷(2けた)の筆算。

86÷23 の筆算である。

前時までの復習も兼ね、ノートに筆算を書きテンポよく進めた。

(1の位をかくし)

$$23 \overline{) 86}$$

$$2 \text{ (A)} \overline{) 8 \text{ (A)}}$$

いくつが立ちますか。(4です。)
次、何をしますか。(かけます。)
何×何をしますか。(23×4です。)
何をしますか。(うつします。)
何をしますか。(引きます。)
何一何をしますか。(86-92です。)

$$\begin{array}{r} 4 \quad 23 \\ 23 \overline{) 86} \quad \times 4 \\ \underline{92} \quad \leftarrow 92 \end{array}$$

広汎性発達障害のA君もここまでは、意欲的に行えている。

2 ×をつけることを肯定する(趣意説明)

(続き)

86÷92はできないので、このように大きく×をつけます。

ここで、

今日は、このようにバツをたくさんつけるお勉強です。
バツがたくさんつく方がお勉強になるのです。

$$\begin{array}{r} \cancel{23} \times \cancel{86} \\ \hline \cancel{92} \end{array} \quad \begin{array}{r} 23 \\ \times 4 \\ \hline 92 \end{array}$$

と趣意説明をする。

この説明を聞いたA君はノートに大きな×をつけた。A君をはじめ大きな×をつけた子を大いにほめた。

もう一度86÷23の筆算をかかせた。商を1つ小さくして3を立てて計算をしていった。

いつもであれば、自分で1度やって答えが間違っていたり、上手いかなかつたりしたらパニックになっていたA君である。しかし、×をつけてやり直せばよいことがわかると、立てた商が正しくなくてもやり直そうとしていった。

3 思わぬジャンプを埋める

A君は、×をつけやり直すことで止まることなく計算できるようになっていった。机間指導のときも「こう(×をつける)すればいいよな」と練習問題をこなしていった。

大丈夫と思い、仮商修正が2回ある問題に取り組ませた。

A君も、平気といった表情で行っていた。しかし、途中で「ワーツ」と言って、机に伏せてしまった。

問題を解いた子がノートをもってきた。○をつけながら、大きな声で

たくさん×がついている。賢い。

と言った。

その後、A君の所に行き、「書いてもいい」と赤鉛筆でうっすらと大きな2つ目の×をつけた。

×をなぞったA君は、もう一度問題の筆算をノートに書き、やり直して答えを出した。ノートをもってきた。正解である。

A君に対して、

すごい、A君もたくさん×がついた。賢くなった。

と、大いにほめた。

1つ×をつければ、仮商の修正ができると思っていたA君。2回修正があるというのは、A君にとっては大きなジャンプであった。そこで、もう一度、「×をたくさんつけること」に意識を向かせたことで、A君は何度も×をつけて計算に取り組んでいった。

4 授業の最後に

時間の最後に、子ども達に「どれだけ×がついたか」とたずねた。どの子も口々に「20回・30回…」と答えていた。

「みんな賢くなったから、自分で頭をなでてあげましょう」と言うと、子ども達は笑顔で頭をなでていた。その中にA君もいた。

授業を終え、そばに来たA君が

「×をたくさんつけてやるからドンドンできるようになった」と嬉しそうに語ってくれた。

(岡山市立建部小学校 麻田邦彦)

エラーレスの学習で間違いをおそれず学習意欲を引き出す

1 間違いをエラーにしない

岡山の小野隆行氏は、エラーレスの学習について以下のように述べている。

算数の授業で間違えることは、エラーではない、それを間違えたままにしていることがエラーになるのである。

向山型算数では、このエラーを出さないシステムになっている。

間違えた問題は、黒板に書いてある答えを写すことができる。

また、教科書チェックで、間違えた問題はやり直すようになっている。

さらに、凄いのは次の指導である。

間違えたら、×をつける。

さらに、×をつけたことを褒められる。

「ノートにたくさんの×がついている人が、お勉強できるようになるのです」

このように向山氏は褒める。最初に聞いた時は、衝撃だった。

間違いが認められる。努力が、認められるのである。

そして、間違いがエラーにならない。

これが、エラーレスラーニングである。

この「間違いをエラーにしない」指導は、算数以外にも応用可能であると述べている。

例えば、暗唱などのテスト。厳しいが上にも厳しく行う。

これも成功したことだけでなく、挑戦しようとしたこと自体を褒められる。

また、あかねこ漢字スキルのテスト。これは、テストが2回制になっている。

2回目は、1回目に間違えた字だけをテストする。1回目でも2回目でも、できたら同じ100点である。

このような指導が多くあればあるほど、子どもは「失敗しても大丈夫」だという意識をもつようになる。

そして、失敗をエラーとしてとらえなくなるのである。

向山型指導法は、エラーレスラーニングで組み立てられている。

だから、発達障がいの子も学習に取り組めるようになるのである。

2 お手本の模倣もエラーレスの学習

福島の大関貴之氏は、ことわざを紹介する学習で「何を書いたらいいのかわからない」A子に対して、ことわざ辞典の中から書くことを指示した。そして、A子はその通りに写してスピーチをすることまでできた。

大関氏は、A子がお手本を模倣して集中して学習することができたことを通して

①限定すること。

②何をどうすればいいのか、方法がはっきりしていること。

③ほめられること。

だったのだ。

これは「お手本を写す」という学習から得られるものだった。

お手本は全体を見通すことができる。何をどのくらいおこなうのか一目で分かる。視覚情報が優位な子には最適だ。

また、失敗が少ない。写せばいいからだ。エラーレスの学習である。

そして、ほめられる。

この「ほめる」ことが重要だ。ほめられることによって脳にアドレナリンが分泌される。それが次への挑戦意欲になる。

これが「お手本の模倣」の効果である。

と述べている。

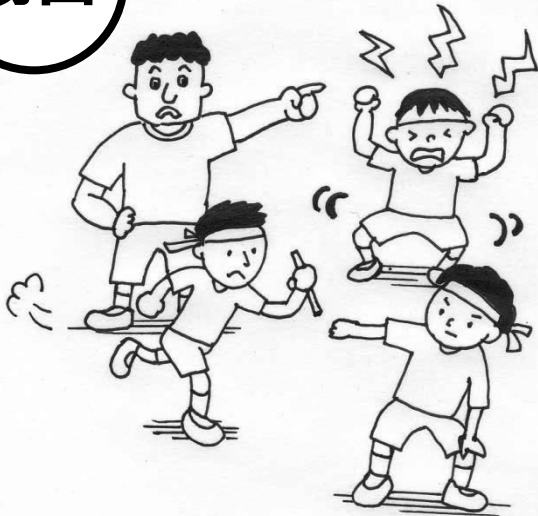
どちらも、行動の方向を示し、それができれば、しっかり褒める。このことで、エラーレスになり、間違いをおそれず取り組むことができるのである。

事例 12

行事・行事練習に入れないとき

運動会・音楽発表会・入学式・卒業式など、1年間に様々な行事があります。行事には練習がつきものです。行事担当の教師も熱心に全体練習を進めています。しかし、その練習に入れなかったり、最初は参加できていても、だんだん入れなかったりしてくる子がいます。

場面



A児は2年生。運動会の練習が始まりました。最初の練習は、体育の時間割とも重なり、参加しました。全体指導の教師は、熱心に声を上げ指導していました。その時間の途中でA児が「うあー」と大きな声を上げ練習に参加できなくなってしまいました。

2回目以降の練習からは、すっかり参加できなくなってしまいました。

① 原因を探る

A児が練習に参加できなくなってしまった原因は何でしょうか。下にできるだけたくさん書きましょう。

■①の解説

【原因1】 特別時間割でいつもと日程が変化しているから

行事の練習が始まると、学年練習の時間・全体練習の時間といつもの時間割とは大きく変化している。

広汎性発達障害の子は、

いつもと変化することをとても苦手とするのである。

【原因2】 練習内容がわからない・見通しがもてないから

「どんな練習をするのだろうか」「どこまでできたら終わりなのだろうか」と、どんどん不安が募ってくる。

見通しがもてない活動には大きな不安が出てくるのである。

中には、練習中に数名の教師が頭をよせ、ミニ会議。挙げ句の果てに「これから変更します」と子ども達に大きな変更を求める始末。

これでは、子ども達が余計に不安になってしまう。

【原因3】 大きな音が出ているから

運動場のスピーカーから出てくる音楽。マイクを通して出てくる教師の声。どれも大きな音である。

広汎性発達障害の子は、

音にとっても敏感である。

何ともないと思える音も、騒音のように聞こえ、不快感を持ってしまう。

また、もう1つ問題なのは、

教師の怒鳴り声である。

教師の怒る声は品がない。不安感を募らせてしまう。そして不快以外の何ものでもないのである。

【原因4】 1度にたくさんのことを指導しているから

ワーキングメモリが少ない

「手を大きく振って、腿を高く上げて、前の人の後ろ頭を見て行進するんです」

このように、1度にたくさんのことを指示される。しかし、何をどうしてよいのかわからなくなってしまうのである。

② 働きかけ・対応を考える

まわりの教師に対してどのような働きかけをすればよいのでしょうか。
また、A児に対してどのような対応が考えられるのでしょうか。
下に書いてみましょう。

教師への働きかけ

A児への対応

■②の解説

【働きかけ1】 計画的に時間割を構成する

それぞれの行事担当者が、運動場や体育館の使用時間割を考える。
そのときに、週毎に使用日が変わらないように伝えて構成してもらうようにする。
例えば、「2年生の運動会の練習は月・3時間目、水・2時間目、木・5時間目」というように。
これを、運動会が終わるまでの特別時間割として、練習が始まる前の週に子ども達に提示しておくのである。

【働きかけ2】 綿密な打ち合わせ・授業の流れをつくる

① シミュレーションし、想定しておく。

「大体こんな感じでいこう」「練習しながら修正していこう」ではよくない。
流れ、動き、並び方等をきちんと確定し、「これで変えない。」というつもりで臨む。

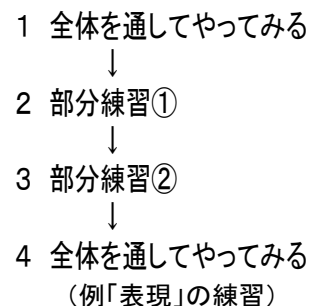
よほどのことがない限り、変えてはいけない。

練習を中断し、「今からこのように変えます」これを繰り返しては、全体が安定しなくなる。

② わかりやすい流れをつくる。

右のような、流れをつくっておく。

「何をすれば、練習が終わるのか」「いま、この練習をしているから、あと2つ練習すれば終わりだな」など見通しをもって、練習をすることができるのである。



【対応1】 音に関する配慮をする

① バリアを取り除く。

運動会の練習・学習発表会の練習等では、BGMの音楽がつきものである。
また、マイクを使つての指導なども行われている。

広汎性発達障害の子にとって、そのBGMの音楽・マイクの音量が騒音のように聞こえるのである。

そこで、音源から遠ざける、耳栓などをさせるなど、音というバリアを取り除いていくのである。そのために、保護者の了承を得る。さらに、クラスでその趣旨をきちんと話しておく。クラスで話すことで、障がいをもつた子に対する理解のきっかけをつくることもできる。

② 目先を変えて取り組む。

練習段階から大きな音量で取り組むのが当たり前。スタートの合図はピストルをと当然のように使う教師がいる。

様々な子がいることを考え、音量をできるだけ絞る・スタート合図はホイッスルでと今まで当然のようにしていたことを再考してみる。

【対応2】 一時に一事の指導でほめまくる

「この場面では、こうして。それからあの場面ではこう」と一度に様々な場面の指導をいくつもする。これで指導したつもりになっている。いざ子ども達がすると、できていない。それで、大きな声で怒鳴ってしまう。

大きな怒鳴り声に、子ども達が不安を募らせてしまう。広汎性発達障害の子は自分に対して怒鳴っていなくても、さらに不安な気持ちが強くなり、パニックになりその場にいられなくなるのである。

局面を限定 し **一時に一事** の指導をしていくのである。

子ども達は、どの場面でどのようにすればよいのか明確になる。

そして、個をほめ・グループ(集団)をほめ・全体をほめて、ほめてほめてほめまくるのである。

ほめることで、だんだんできるようになっていく。そして、練習の場が、心地よい状況になっていくのである。

教室での エピソード

A子が笑顔で運動会に参加！

バリアを取り除くことで、進んで練習に参加し、本番をむかえることができた。

1 不安そうな表情をしていたA子

A子は、特別支援学級の3年生の女の子。

運動会の本番、時には耳をふさいだり、時には目をカー杯閉じたりしながら応援席にいた。

A子は、音に敏感であった。特にピストルのなる音に。演技係の教師がピストルを空にむけて構えると、耳をふさぎ、顔を背けていた。「もう大丈夫だよ」といっても、しばらくはその姿勢のままであった。

また、カメラのフラッシュの光にも敏感であった。カメラは光るという思いこみから、フラッシュがたかれなくても、カメラが向けられると、反射的にその場で止まり目を閉じ、体を固めてしまっていた。

A子にとって、行事に参加するということは不安の連続であったのだ。

2 保護者に相談

4年生になり、担任もかわった。家庭訪問で、音や光に敏感なことも話題に上がった。新学期にクラス全員がそろって写真を撮るときも、個人写真を撮るときも目をカー杯つむっていた。

1学期の終わりの個人懇談で、保護者に運動会での取り組みを相談した。

- ① 音に対しては耳栓をしてみてもどうか。
- ② 光に関してはサングラス(色つきのメガネ)をかけてみるかどうか。

保護者は、協力的に賛同してくれた。

3 交流学級の担任や子ども達に説明

運動会の練習が近づき、交流学級の担任にも耳栓やメガネをつけることを説明。そして、交流学級で子ども達にも説明をした。

- | |
|---------------------------|
| ① 音や光が苦手なこと |
| ② 苦手なことがなくなれば、十分力を発揮できること |

子ども達は、十分理解を示してくれた。

4 欠かせないアイテムに

練習が始まった。

練習は、ほぼ毎日行われた。A子の表情で楽しかったのかどうかがわかる。

よい表情の時は、その時間に何をすればよいのかきちんと理解できたときである。

暗い表情で帰ってきたときは、どうすればよかったのかわからなかったときである。

そんなときは、交流学級の先生にポイントを聞き、教室で一つ一つ指導していった。

そんな中でも、耳栓とメガネは欠かせないアイテムとなった。うっかりわすれてしまうと、慌てて教室に取りに戻っていた。

5 アイテムがなくても

ある日、A子は、うっかり教室に耳栓とメガネをわすれていってしまった。いつもなら取りに戻るのに、この日は、取りに戻ってこなかった。

念のためにと思い、耳栓とメガネを持って外に出てみた。そこには、熱心にリレーや表現の練習をしたり友だちを応援したりするA子の姿があった。

教室に帰ってきたA子に

「耳栓やメガネがなくてもできたな。すごいなあ」

と声をかけ、思いっきりほめた。すると、A子は

「ピストル使わないんだって」

と言った。A子にとって不安がなくなり、1歩前進した瞬間であった。

6 他の学年の練習も見学

A子のいる特別支援学級の他の学年の応援にもいった。

「何かあれば、つけるんだよ」と手提げバッグの中に耳栓とメガネを入れていった。しかし、友だちを応援するのに一生懸命で、そんな物は必要ないといった様子であった。

7 本番

耳栓とメガネは、A子にとって必要ない物となっていた。

しかし、本番。何が起こるかわからない。いつもとちがう環境。

念のために、手提げバッグに耳栓とメガネをしのばせて応援席に持っていかせた。

耳栓やメガネがなくても熱心に走ったり、笑顔でダンスをしたりするA子の姿があった。また、応援席でも応援団の声に合わせて応援もしていた。

去年のA子の姿からは想像できない姿であった。

(岡山市立建部小学校 麻田邦彦)

怒鳴らない、雑音を消す、ボリュームを絞る

担任は音に敏感すぎる反応をする子にも配慮して生活せねばならない

「位置について！」

「ヨーイ」

運動会定番演技「徒競走」のスタートである。

スタートの姿勢をとらずに、両手で耳をふさぐA君が気になった。ピストルの音がいやだ、と言う。開会式の時も、スピーカーの音に反応して、耳をふさぎ座り込んでしまった。

A君はたぶん、音に対する知覚障害なのかもしれない。

我々が聞こえる音の大きさの数倍の大きさで聞こえる子がいる、という情報は知っていた。A君の場合は、運動会の時に気がついたので、ピストルを撃つ人の位置を変えてもらうぐらいしかできなかった。

練習の時に、分かっていたらピストルを撃つ人の位置について、耳をふさがなくて済む位置を探せたかもしれない。

また、ピストルの音に慣れるための対策も取れたはずである。

それがダメなら、笛で合図することも考えられる。

耳をふさぐとスタートが遅れる。見ている人が不審に思ったりもするだろう。

事前に対策をとらねばならない。予行練習の時にこそ見つけなければならない。予行練習は、そのためにある。

スタートはピストルで行うと決めたのはだれなのか。

華々しくて、盛り上がるのは間違いない。

しかし、A君のように音に対して敏感すぎるくらい反応してしまう子への配慮も考えなくてはならない。

(中略)

A君のように、音に敏感な子が分かっている時は、その子と一緒に音量を調整すればいい。

具体的に分からない場合は、我々にとって少し小さいなと感じる音くらいでちょうどいいと思えばいいだろう。

これらの音よりも、更に問題な音がある。

それは、担任の怒鳴り声である。これが一番厄介である。

毎日毎日、生活を共にしている担任の先生の声が、大き過ぎる雑音になっているのである。

怒鳴り声は、我々が聞いても大きいし、気持ちのいいものではない。

怒鳴る教師は、怒鳴り声が習慣になっている場合が多い。

プロの教師の必須条件の1つにこれがある。

怒鳴らない

怒鳴ってはいけないのである。怒鳴る教師は、プロではない。

特別支援教育を視野に入れている学校は、「怒鳴らない」を教師間で共通実践としているはずである。

毎日怒鳴り散らす教師の学級では、発達障がいの子はもちろん、そうでない子までもが、情緒不安定になってくる。

学級も荒れている。

笑顔と共に、落ち着いた柔らかい声で生活したいものである。

槇田健「教室ツーウェイ」 2009年11月号（明治図書）

怒鳴って指導することの怖さ

行事の指導で、子どもの動きが悪いと、すぐに大声で怒鳴る教師がいる。
そのことが、発達障がいの子にとってどのような影響をもたらすのか考えたことがあるだろうか。

それがよくわかる出来事があった。

1 対人恐怖症があるA君

〇〇、ぶっころす！

これが、交流で来ている特別支援学級のA君の口癖だ。

A君は、広汎性発達障害。対人関係の恐怖症がある。集団に入るのが苦手で、始業式初日は、交流学級に入る時に震えていた。

A君は、いつも否定的な言葉を繰り返す。

学校が壊れてしまえばいい。
俺が高校生になったら、おまえなんかぶっ殺してやる。
なんで運動会なんかあるんだ。
交流にいくと、心臓が止まる。

そう言いながらも、交流から帰ると最近、ルンルンの状態なのだそう。
A君は、国語、社会、算数以外の教科は、交流で学習している。

2 運動会の全体練習でパニックになる。

ある日の運動会の全体練習の後、予定の交流に来なかった。

最近、喜んで交流に来ていたのにおかしいなと思っていたら、どうやら全体練習が原因で荒れていたという。

「〇〇ぶっころす」
「あいつなんか、消えてしまえばいい」
「あいつがいるから、できないんだ」

そんな言葉のくり返しだったそう。

〇〇とは、体育主任のこと。

体育主任に対して、パニックになるほど怒って、上のような言葉を浴びせかけていたのである。

体育主任は、いったいA君に何をしたのだろうか。考えてもらいたい。

その場にいた私も、全く見当がつかなかった。

だって、体育主任は、直接A君に何もしていないのだから。

では、A君がパニックになった理由は何なのだろうか。

3 パニックになった理由をA君に聞く

次の日、交流の学習を早めに終わったので、教卓のところにA君を呼んだ。
膝の上にのせて、全体練習のことを聞いてみた。

この前、交流に来なかったでしょう。先生、心配していたんだぞ。
どうして、来なかったの？

A君はもじもじしていた。

〇〇先生のことを怒ってたんでしょ。

こう言うと、一瞬不安そうな顔になったので、すぐに、

いいんだいいんだ。思ったことは本当なんだから。
それに、もう終わったことなんだからね。

そう言うと、「は～」と深呼吸し、少しやわらいだ。

続けて、何が腹がたったのかを聞いてみた。

A君は、次のように理由を教えてくれた。

いつも怒るばかりだから、こわくなるんだ。
胸がドキドキして、どうしていいかわからなくなるんだ。
あいつは、怒ればいいと思っているんだ。
だから、許さなかった。

A君の言葉を聞いて、一瞬言葉を失った。

しかし、そのことを話すA君は、少し興奮気味になっている。自閉症の子には、過去のことをあたかも先ほどのことのように思い出すタイムスリップ(トラウマの場合はフラッシュバックと呼ぶ)がある。

すかさず、次のように言った。

そうかそうか。悪いことをした時、怒られるのはしょうがないけどなあ。
いつも怒ってたら、こわいもんなあ。

そう言うと、安心したように、「うん」と頷いていた。

4 教師の世界の恐ろしい習慣

特別支援を要する子どもは、行事が苦手である。

それなのに、そういった子に、教師がさらに負荷をかけていたのだった。

行事の前になると、学校のあちこちから教師の怒鳴り声が聞こえる。

怒って動かす。
怒鳴って動かす。

これを特別支援を要する子に使うということは、どのような影響を及ぼすのかということが、はっきりとわかった。

ちなみに、私の学年は褒めることを中心に練習を進めた。だから、A君にストレスはなかった。

目の前の子どもの事実を目を向けることなしに、特別支援教育など成り立たない。

小野隆行「ジュニア・ボランティア教育&総合的な学習」2008年9月号
(東京教育技術研究所)

事例 14

状況に合わない言動をとってしまうとき

友だちが嫌がっているのに、嫌がる言動をとる。周囲の子がうるさがるほど「大きな声」で話すなど、クラスには様々な子がいます。その状況に合った行動をとらせるためにどのような対応をしていけばよいでしょうか。

場面 1



クラスの中に、広汎性発達障害の診断を受けた児童が数人います。この子たちは、

- 友だちが嫌がっていることが理解できず、友だちの嫌がる言動をとる。
- 周囲の子がうるさがるほど「大きな声」で話す。
- 協力し合う場なのに活動する場を離れたり、活動に夢中になって言動が乱暴になってしまったりする。

など、場の状況に合わない言動をとります。

対応を考える

場の状況に合わない言動をとる子にどう対応しますか？
下に書いてみましょう。

コラム

状況を理解するのが苦手な子

状況を理解することが苦手で、友だちが傷ついてしまう言動をとってしまう子どもがいます。また、周囲に合わせて活動することが難しい子どもがいます。結果的に活動の邪魔をしていると受け取られたり、活動に参加していないように思われたりします。

新潟特別支援教育研究会・大森修編

『場面サインを見逃すな！通常学級担任用：特別支援教育対応シート』（明治図書）

また、「こだわり」や過去のことを思い出して言動してしまう「フラッシュバック」などのために、状況に合わない言動をとってしまうことがあります。

■解説

【対応】 視覚的に捉えさせて、指導する

例えば

例1) その場での取るべき行動をしてみせて、真似させる

- ① 相手が嫌そうな顔をしているのに、人の物を断りなしに借りる子がいます。そのような場合には、「人の物を借りるときは『貸してください』とお願いします。借りた後には『ありがとうございました』とお礼を言います」と

その場で行動の仕方を教え、実際にやらせてみましょう。

真似できたらほめて行動を強化していきます。

- ② 周囲の子がうるさがるほど大声で話したり、体育や遊びで友だちとタッチするときに、相手が痛くなるほどの力でタッチしたりする子には、

モデルとなる姿を取り上げて

伝えてみましょう。

- ③ 声の大きさの調節が難しい子には、

モデルとなる子を取り上げて、
「〇〇さんのような声の大きさを話してみましょう」

と伝えます。

- ④ 力の加減の難しい子どもには、

「手と手をやさしく、パチンと合わせます」とモデルを見せながら、実際にやってみせる

とよいでしょう。

例2) 協力し合う場では、役割と手順を視覚化して示す

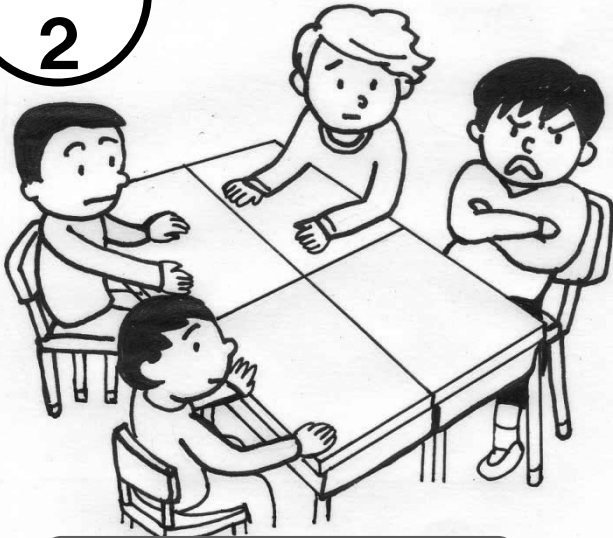
周囲と協力し合うことが苦手な子には、

その子の役割とその仕事の手順を絵やカードなどで視覚化して示してあげましょう。

自分の役割の仕事が終わったときに何をすればよいかも具体的に示しておくことで協力し合う状態を作ることになります。

新潟特別支援教育研究会・大森修編
『場面サインを見逃すな！通常学級担任用：特別支援教育対応シート』（明治図書）

場面 2



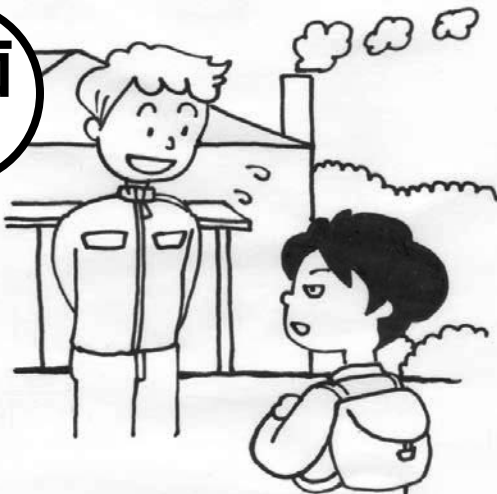
対応を考える

トラブルにならないように、話し合いを始める前に、この子たちにどう対応しますか？下に書いてみましょう。

A君は低学年。診察を受け、アスペルガー症候群と診断されました。「お店に行って何を見るか？どんなインタビューをするか？」と班で話し合いをしました。自分の考えと違う意見に決まりそうになると「いやだ。ぜったいいやだ」と突っぱねて周りを困らせました。そして、教室から出て行こうとしました。

「じゃーA君は、なにがいの？」と聞かれても明確に答えることができず班の子も困ってしまいました。

場面 3



対応を考える

トラブルにならないように、この子たちにどう対応しますか？下に書いてみましょう。

校外学習で、ある施設から帰るときに、施設の方がA君に声をかけた。「僕ね、気を付けてね」とすると、A君は「僕じゃないよ、〇〇君だよ」と返答。他の施設でも、同じ場面があったときに「僕じゃないよ、〇〇君だよ」と同じく返答していた。

場面

2

■解説

【対応】 話し合いのフォーマットを示す

これは、最初に言い出した人が勝手に決めたとA君は理解したのだ。A君の頭の中では『勝手に決めるのは駄目なこと』とインプットされているので、反対しているのは、一見わがままにも見えるが、本人にとっては正当な対応をしているのである。そして、いったん決まりかけたことについては、もう何を言おうと拒否してしまう。最初が肝心なのである。そこでどのように対応するかというと、

『話し合いのフォーマットを示す』

ことである。自分の意見を言わせるなかで、「それがいい！」とかいかにも決まりそうな話し合いにしない心掛けが必要である。

- 1) 自分の意見の発表(質問無し)
- 2) 友だちの意見への質問
- 3) 相談
- 4) 決定

桑原和彦「特別支援教育教え方教室」19号（明治図書）

場面

3

■解説

【対応】 できないことは教える

これは常識で対応すると失敗する。知らないことなのだから教えればよいのだ。対応はこうだ。「A君、『僕はAって言います』と言えばいいんだよ」と、教えるのだ。そうすれば理解してできるようになる。「どうして？」とか理由や原因を求めるのではなく、知らないから教えてやればよいと考える。

「男の子は自分のことをA君なんて普通言わないよ」と言っても理解できないのだ。診断したドクターからの言葉を紹介する。

頭の中で考える能力と言葉遣いに差があるために、感情や曖昧な表現を使わないで、大人へ説明するように理論的に説明し、結果を伝えるようにすると理解できる。

桑原和彦「特別支援教育教え方教室」19号（明治図書）

1 変身するA君

今年度、2年生の担任となった。

国語の教科書を追い読みしていると立ち上がるA君の姿が視界に入った。

「シュー、シュシュシュー！」

教室中に響く声を出しながら天井に突き刺さるように手を挙げている。A君の変身が始まった。今日は仮面ライダーである。

たまに変身するならまだしも、毎日、毎時間のようにA君は変身した。

ウルトラマン、仮面ライダーになりきっているA君には、周りの様子が全く目に入っていない様子である。

周りの子も気になってしょうがない。

ある日、「A君、静かにして」と注意した子がいた。さっと変身を止めたA君は、「誰が言った！」と言って殴りかかっていた。

目はつり上がり、「ハーハー」と息を吐いている。A君にどんな言葉も届かなかった。

このままでは、A君もクラスの子もかわいそうである。

まずはA君の変身をやめさせることが必要に思われた。

しかし、「やめなさい」と注意してもいっこうに止める気配はない。厳しく注意すれば、「うー」とうなり声を上げながら、今にも切れそうになる。

注意することでは、A君をよい方向に向けることはできなかった。

2 変身の原因

A君が変身する場面を注意して見ていると2通りの原因があることに気がついた。

1つ目は、

不安になったとき

である。

「どうやっていいのかわからないとき」「わたしがかまってあげていないとき」に決まって変身し始めた。変身するものは、仮面ライダーやウルトラマンといったヒーローものだった。

もう1つは、

うれしいとき

である。

問題が解けたときなど、決まって「かにさん」に変身した。にこにこしながら、教室中を走り回った。

「かにさん」になるときは、他の人に迷惑をかけることはなかった。周りの子もほほえましく見守っていた。

問題なのは、「不安になったとき」に変身するときだった。

3 目先を変える

不安が原因で変身している時には、すっかりヒーローものになりきっていた。普通に話しかけても全く耳を貸そうとしない。ではどうすればいいのか。

目先を変える

ことである。

そのために、あの手この手で目先を変えようとした。山ほどの失敗の中から効果があったものをいくつか紹介する。

①一緒に変身する

「A君おもしろいことやってるね。一緒に変身したい人？」と一緒に変身してくれる人を募った。

学級開き間もない頃で恥ずかしいのか、誰も手を挙げない。そこで、私が一緒に仮面ライダーに変身した。

必死になって変身しているA君の横で、A君よりも派手に変身する。

さすがのA君も私のことが気になって仕方ないようである。

「A君これでいいのか？」と尋ねると、「えっ」と我に返るのが分かった。

②あと何分変身してるの？

変身しているA君に向かって、「おもしろいことやってるね。それ何？」と尋ねた。

「○△□※？」とヒーローものの名前が返ってきたがよく聞き取れない。

「ところで、あと何分変身してるの？」と聞き返した。

はっと我に返るA君。指を折りながら1、2、3……と考え始めた。

③変身スイッチ

変身を始めたA君にリモコンを持っているふりをしながら近づいていく。

「おっ、ウルトラマンか。じゃあ今度は、飛行機」

そういいながら、ボタンを押す格好をする。

A君は、それに併せて飛行機になって教室を走り始める。

「次は、かにさん…」つぎつぎに変身させていく。

そして最後に「今度は、勉強君」と言うと、席について、勉強を始める格好をするのだった。あとは、そのまま授業を続けた。

目先を変えさせるには、まずは**A君の変身を受け入れる**ことが大切であった。

いったん受け止めたら、A君が「はっ」とするようなことを言ってやる。

ちがう思考回路を作ることでA君を我に帰すことができた。

こうして初めて変身を止めさせることができたのだった。

藤原能成「マガジンMAK 第4期」No.22 (TOSS岡山サークルMAK)

意表を突く指導

～高度信頼関係をつくり、約束をすることで対応する～

1 意表を突く指導

休み時間に子ども達が、訴えに来ることがある。Aちゃんが、悪口を言ってくるというものだ。日常どのクラスでも起こる。

通常は、その子呼んで悪口を言わないように注意し相手の子に謝ればそれですむ。

しかし、そうではない子がいる。

何度注意してもすぐに悪口を言ってしまう子である。注意すればするほどパニックになってよけい手がつけられなくなる子だ。

これは、何で悪口を言うのかよく聞いてやることが大切である。

悪口を言うにも意味があるのかもしれない。

甲本の指導場面を再現してみる。

T 「A君。悪口を言ったのか」

普通の顔でたずねる。

A 「…(無言)」

T 「A君。悪口を言ったのか」

少し優しい顔(子どもにもよるが、このような場合、優しい顔が、多い。)

A 「うん」

T 「えらい。よく言った。こういうことは、なかなか言えないもんだ。普通は、うそをつくもんだ。すごいぞ」

とほめる。

A君にしてみれば、怒られると思い教師の前に来ているのだ。覚悟もあるだろう。

最初は、硬い。なかなか口も開かない。

そこで、ほめられるのだ。意表を突かれることになる。

そして、次を聞く。

2 悪口を言う理由がある

T 「A君。悪口が、言いたいのか」

A 「そうじゃ」

T 「何でそんなに悪口が言いたいの」

A 「そりゃあ、前に僕の悪口を言ったんじゃもん」

T 「へー。それは、いつ」

A 「去年の3月じゃ」

T 「去年のことを、いまから思い出して悪口言いたかったのか」

A 「そうじゃ」

T 「でもなー、そのことを水に流し。もう言わないのもかっこいいぞ」

A 「うん」

T 「そんなら約束で」

A「うん」

などと指導する。

理由をちゃんと聞いてもらい認めてもらっているの、この後の指導もやりやすい。

T「A君。Bさんに謝ろうな。悪口を言われたら辛いからな」

A君は、その後、素直に謝った。

すべてうまくはいかないが、そのことを何度も繰り返すなかで学習していく。

一番だめな指導は、頭ごなしに叱ることだ。

「なんで悪口をいうんだ。問答無用。お前が悪い」

と指導すると、必ず二次障害を引き起こす。ADHDでなくても指導の原理は、同じである。

やんちゃな男の子も同じだ。

面子を保ってやるのだ。

全員の前で指導しても効果が上がらないことがある。2人になり話をすればよくわかることもある。プライドを傷つけないように指導することも大切である。

3 教師と約束をする

さて、先ほどの指導場面であるが、もうひとつポイントがある。

それは、**教師と約束をしている点**だ。

約束は、高度信頼関係の上に成り立つ。

次に悪口を言ったとする。

もちろん言ったことは、悪いからそのことを指導すればよい。

そして、次に指導するのは、**教師との約束を破ったことを指導**する。

T「先生と約束を破ったろ。先生が、一番辛いのは、先生との約束を破ったことだ。先生は、君の事を信頼して約束したのに、どうして約束を破ったんだ。そのことが一番つらい」

などと約束のことで話をする。

「悪口を言ってはいけない」このことはよく知っている。今までに何回も注意されたはずだ。しかし、今度は、約束を破ったことで注意される。

プライドが、高ければ高いほど約束を破ったことのショックは、大きい。

そこを突く。

教育は、格闘技だ。緩めるところと攻めるところを間違えてはいけない。

「先生との約束を守ろうぜ。俺は、A君が、大好きだ」

などと締めくくる。

しかし、教育は、そう甘くない。次に悪口を言うことがある。

「A君。どうしたんだ。先生は、心配しているんだ」と言って約束を破ったA君を次には、**心配**する。

「どっか具合でも悪いのか。そんなことするはずがないもんな。大丈夫か」

怒られると思って先生のところに来たのだが、逆に心配された。A君にとってはここでも**意表を突く指導**となっている。

甲本卓司『甲本卓司提言集⑩ ADHDの子に効果のある授業の原則七か条』(明治図書)

事例

18

PDDをクラスの子に説明するときの指導

クラスに特別支援を要する子は必ずといっていいほどいます。その中にPDD（広汎性発達障害）の子もいます。PDDの子は、まわりの子からみると理解できない発言や行動をすることがあります。最初は、何とか接しようとしていたまわりの子も、違和感を感じたり、特別な目で見たりするようになってきます。クラスでもPDDについて正しい理解をさせていく必要があります。

場面



クラスに複数、広汎性発達障害と診断された子がいます。普段は、まわりの子と仲よくすごしています。しかし、突然怒り出してみたり、上手くコミュニケーションが取れなかったりしています。

授業中に分からない問題があると、机に突っ伏して「わー」と大きな声を出したり、道徳で気持ちを考える場面では、「わからない」といって泣き出したりします。

この言動が、だんだん目立ち始め、まわりの子も、少し距離を置き始めているようです。

対応を考える

クラスの子にどのような説明をすればよいでしょうか？
思いつくだけ書いてみましょう。

■ 解説

【対応】トラブルなく共存できる具体的なスキルを教える

山口県立大学教授の林隆医師は次のように述べている。

PDDの疾患概念を説明するだけでは理解や支援を得ることはできません。
PDDの子どもの持つ違う価値観に基づく集団生活のとらえ方、当たり前の対応が不安や恐怖に直結する仕組みを説明し、どのような物言いや態度をとると、円滑な共存生活が可能かを解説します。
ADHDと重複しますが、おかしなことを修正するのではなく、どうしたらトラブルなく共存できるかという具体的なスキルを教えることが最大の理解であり支援です。
休み時間の過ごし方で行うとよいでしょう。

林隆・TOSS長州教育サークル『小児科医と共に提案！教室でする発達障害への教育コーチ』（明治図書）

教室での
エピソード

トラブル回避の型を確認する

～クラス全体で共通した型を守ることで、クラス全体が落ち着いてくる～

1 トラブルが起きそうなとき

休み時間に、誤解からけんかになったことがあった。

PDDの子は興奮状態である。

「ぼくの机の横を通るとき、わざとぶつかってきて笑った」と言う。

それに対して、「せまいから当たってしまっただけだし、笑っていない」と言う。

PDDの子は、机がずれて、誰がやったのか顔を上げたとき笑われたと思い、一瞬にして興奮状態になり、つかみかかっていた。

2 全体で確認

トラブル回避の型を教える。

まず、机に当たってしまったとき、どうしたか確認した。謝っていないと言う。全体に問いかけると、「わざとでなくても謝らなければならない」と言う。

その場で謝らせた。PDDの子の表情が落ち着いた感じになった。

そのうえで、事情を説明させた。せまいところを通ろうとして当たったのだと言う。すんなり納得した。

PDDの子は、被害的にとらえ、カッとなり、けんかに発展する。

その子だけに限定せず、どうすればよいかを確認した。

相手に迷惑をかける→謝る→事情を説明する

この型をクラスの子が守ったことで、PDDの子とのトラブルは激減した。

それによって、クラス全体が落ち着いた雰囲気になった。

林隆・TOSS長州教育サークル『教室でする発達障害への教育コーチ』（明治図書）

正しい理解をすることで、仲のいい学級ができた。 決して逃げてはいけない

～障がいの正しい理解こそが、真の意味で仲のいい学級そして学校を創ることができる～

1 真の意味での仲のよさ

A君とB君(自閉性障害 特別支援学級4年生)は、授業の中で様々なことができるようになった。本人たちの自信もできた。それに伴い、交流学級では、討論やKJ法等自閉症の子が苦手といわれる活動にも数多く参加できるようになった。一見、交流学級の子ども達とも仲はとてもよさそうだった。

しかし、ささいなことでトラブルは絶えなかった。同学年なのに遠慮がちに接する、ほとんど会話をしようとしなない、遠くから見るだけ、いつもけんか腰に付き合ってしまう…等々。仲のいい子でも、いざ2人がパニックになったり、意味のないことを話し出すと困惑してしまい対応できない。そんな微妙な空気の中では、真の仲のよさはつくれなないとずっと私は思っていた。

2 正しい理解が差別をなくす

「正しい理解こそが差別をなくす」「正しい理解が差別を生まない」と以前より考えていた。例えばエイズ、例えば障害者、その他数々の差別や偏見…。正しい教育、正しい理解を生む授業こそが、偏見をなくし差別をなくしていく。ずっとそう考えていた。

特別支援学級に在籍している2人のことも同じだった。担任してずっと「全校生に正しく自閉症の理解をさせたい。正面から2人の障害について授業したい。対応方法も教えたい」と思っていた。しかし、その勇気がなかった。前例もない。それまでの担任の先生も私も何となくぼかしながら全校生には伝えていた。「何か困ったら先生に言ってね」「少しみんなと勉強するスピードが違うんですね」等である。しかし、このままではいけない。何もしないのが一番いけない。だれかがきちんと伝えなければいけない。そう思っていた。

担任して2年目の5月。全校生に話す機会が訪れた。本校では、人権朝会といい職員すべてが年に一度人権の話を全校生にする機会があった。5月は私の番。新しい年が始まり、少し落ち着いたこの時期。話をするには最適な時期であった。もうやるしかなかった。

3 話ではなく授業する その準備

話の3週間ほど前より、下記の準備を行った。

話す時間は15分。話せばかりいても仕方ない。発問指示を考え、授業として構成した。

- | | |
|----------------|-----------------|
| (1) 保護者へ了承を得る。 | (2) 本人に了承を得る。 |
| (3) 校長に了承を得る。 | (4) 指示発問を組み立てる。 |
| (5) サイトを作る。 | |

中でも大変だったのが「保護者への了承」であった。話すこと自体は大いに賛成してくれた。「そんな先生がいてくれてよかった」「ぜひ話してほしい」2人の保護者とも口をそろえて言っていた。

しかし内容面は何回も書き直し、その都度見てもらった。「うちの子は自閉症とはっきり言ってほしい。その上で対応法なども話してほしい」と1人の母親は言った。もう1人の母親からは細かい部分、だれを事例としてあげるか等、様々なアドバイスまでもらった。

そして5月。すべての了承をクリアし、全校生に授業することとなった。

4 授業「自閉症」(簡単に流れのみ紹介)

(1) (漫画「光とともに」の表紙を提示)

「光とともに。読んだことある人。(多数挙手)光君は自閉症という障がいです」

(2) 光君のセリフを読んでいきます。

- ① 音の洪水でパニックになる場面
- ② 友だちの会話に対応できない場面
- ③ 集団行動できない場面

(3) 自閉症の人はどんなことに困ると思いますか。

- ① 他の人と上手に付き合うのが苦手
- ② 話をバランスよくするのが苦手
- ③ 好きなこと、嫌いなことが極端

「だから疲れてしまうことがあるんですね」

(4) でもね、自閉症の中にはすごい人だっているんです。

- ① レインマンの一部分視聴
- ② 山下清のはり絵
- ③ モーツァルトの作曲法

(5) そしてひまわり学級の2人も自閉症という障がいをもっているんです。

(6) みんなへのお願いです。

- ① 怒ったりしているときは、そーっと見守ってください。
- ② やさしく、おだやかに、静かに、やり方(〇〇しようね等)を教えてください。
- ③ どうしても分からないことや困ったことがあったら川原先生に相談してください。

(7) 他にもいろいろな障害があります。

みんなが仲よく幸せに暮らせるために、障がいを理解することはとても大切なのです。他にもぜひ調べてみてください。

5 授業その後 真の仲のよさとは

2人のうち1人の保護者も参観に来られた。次の感想をいただいた。

よかったです。よく分かりました。小さい子にも伝わったと思います。ありがとうございます。これからが楽しみです。

子どもの感想は次である。

「A君とB君がなぜ〇〇をやっていたのかやっとなりました。これから自然に友だちになれそうです。」

その後、交流学級を始め、全校の子ども達が、私の学級の子と休み時間もよく遊ぶようになった。見ていて自然にもなった。

相手を正しく理解できる。これが真の意味の仲のよさではないだろうか。逃げてはいけない。正面きって授業することが大切だ。